

発達障害幼児のぬり絵の発達に関する一考察

尾崎 康子¹⁾

本研究は、発達障害児に対してぬり絵を行い、幼児期における発達障害のスクリーニング検査としてぬり絵が有効であるかどうかを検討することが目的である。絵を描かせることに比べて、ぬり絵はどの幼児も喜んで取り組む描画活動であり、ぬり絵を発達スクリーニングとして活用することができれば、幼児に対する有用なツールとなりえるであろう。そこで、本研究では、研究Ⅰで定型発達幼児のぬり絵の発達を調べ、研究Ⅱでは、発達障害児Aに対して遊戯療法中にぬり絵を実施し、ぬり絵の発達過程を縦断的に調べることにより、ぬり絵が発達障害のスクリーニングとして可能かどうかを検討した。その結果、本事例の発達障害児のぬり絵は定型発達と概ね同じ段階であったが、発達障害児の急速な認知発達に応じてぬり絵が発達変化していく様相を捉えることができた。

Key words ; ぬり絵, 発達障害, スクリーニング検査, 幼児期

問題及び目的

平成19年4月から特別支援教育が本格的に開始され、これまで障害児教育の対象から外れていた発達障害への発達支援が重点的な教育課題となった。また、これと前後して施行された発達障害者支援法により、発達障害児に対する発達支援は、乳幼児期から老年期にいたる生涯発達において連続して行う視点に立つことになった。そのため、従来の障害児教育が主に学童期以後に焦点があてられてきたのに対して、乳幼児期からの援助が保育園や幼稚園においても求められるようになった。しかし、乳幼児期における発達障害児への援助は主に2つの点において困難を有している。一つは、保育園や幼稚園の保育者は、保育者養成過程において障害教育を専門的に学んでいないために、保育者が障害児教育に対して苦手意識を持っていること、そして、もう一つは、乳幼児は発達途上でありかつ個人差も大きいため、発達障害が軽度であるほど、乳幼児期に発達障害が発見され難いことである。そこで、後者については、乳幼児期における早期発見の重要性から、現在、様々なスクリーニング検査が検討されている。しかし、その多くは、子どもをよく知る大人、例えば親や保育者などが質問紙形式の検査に回答するものである。従って、実際に子どもが行う課題によってス

クリーニングできる検査の開発が期待される場所である。

ところで、近年、ぬり絵が様々な分野で注目されている。古賀(2005)は、大人がぬり絵をしている時の脳の状態を調べ、ぬり絵が脳の広汎な領域を活性化させること、特に創造や思考の中核である前頭前野を活性化させることを明らかにした。従来、日本の保育において、ぬり絵は正当に評価されず、子どもの嗜好的活動として保育の合間に行われてきたにすぎなかった。また、美術教育においても、子どもたちの創造性を損なうものとして、子どもの表現活動の領域から排除される傾向にあった。しかし、脳科学の研究成果によりぬり絵が高次な精神機能と関係することが示されたことから、ぬり絵の意義を問い直す動きが出てきた。

一方、尾崎(2008)は、30～69カ月の定型発達幼児289名を対象に3cmの円を塗りつぶす「円塗課題」を行った。その結果、Figure1に示すように、幼児の円塗行動の発達を捉えることができた。すなわち、30-33カ月では、円の中に丸や円錯が描かれているだけで、塗り残し面積は大変多く塗りすぎ面積は少ない。36カ月以降、円をかなり塗りつぶせるようになるが、依然として塗り残した部分は多くまた円から外へはみ出して塗りすぎも生じている。しかし、加齢とともに塗り残し塗りすぎ面積は次第

1) 相模女子大学人間社会学部

月齢段階	円塗り	
30-33ヵ月	 S.N. (32ヵ月) 塗り直し 596mm² 塗りすぎ 11mm²	 K.Y. (32ヵ月) 塗り直し 386mm² 塗りすぎ 47mm²
36-39ヵ月	 T.M. (39ヵ月) 塗り直し 276mm² 塗りすぎ 45mm²	 K.S. (39ヵ月) 塗り直し 287mm² 塗りすぎ 41mm²
42-45ヵ月	 R.K. (42ヵ月) 塗り直し 173mm² 塗りすぎ 62mm²	 M.O. (42ヵ月) 塗り直し 202mm² 塗りすぎ 72mm²
48-51ヵ月	 T.I. (48ヵ月) 塗り直し 97mm² 塗りすぎ 62mm²	 H.S. (48ヵ月) 塗り直し 129mm² 塗りすぎ 67mm²
54-57ヵ月	 S.M. (54ヵ月) 塗り直し 48mm² 塗りすぎ 33mm²	 K.B. (57ヵ月) 塗り直し 46mm² 塗りすぎ 62mm²
60-63ヵ月	 N.A. (60ヵ月) 塗り直し 363mm² 塗りすぎ 32mm²	 A.W. (61ヵ月) 塗り直し 104mm² 塗りすぎ 42mm²
66-69ヵ月	 S.T. (66ヵ月) 塗り直し 8mm² 塗りすぎ 22mm²	 A.O. (69ヵ月) 塗り直し 8mm² 塗りすぎ 17mm²

Figure1 円塗課題における塗り上がりの例
(尾崎, 2007)

に少なくなっていき、66-69ヵ月になるとほぼ正確に円は塗りつぶされる。また、正確に円を塗りつぶせるようになる背景には認知発達と運動発達が関係していることが明らかにされた。このように「塗る」という描画行動が一定の発達状態を表しているということは、ぬり絵を用いたスクリーニング検査の可能性を示唆するものである。グットイナフ人物画知能検査(小林, 1977)のように、子どもに絵を描かせ、それによって精神発達を評価するという試みは今まで多くの研究者によって行われてきた。しかし、筆者の経験では、絵を描くことを要求すると、小さな子どもであっても、それに対して抵抗や拒否を示す子どもがいる。自分は下手だから描きたくないとか、まだ絵が描けないから描かないとか、あるいは緊張して描かないなど、絵を描いてくれないことが多い。しかし、ぬり絵の場合、これも筆者の経験で言えば、塗ることを嫌がる子どもは皆無であった。絵が描けなくてもまたどんなに緊張性の高い子どもでもぬり絵を塗ってくれた。そこで、子どもに好まれ、抵抗感の少ないぬり絵をスクリーニング検

査として用いることは大変有効であると考えられる。

そこで、本研究では、発達障害児におけるぬり絵の発達を調べ、ぬり絵を用いたスクリーニング検査の可能性を検討するものである。具体的には、研究Ⅰでは、尾崎・竹井(2007)が、ぬり絵の発達段階を考慮して開発したぬり絵を用いて、定型発達幼児のぬり絵の発達を調べる。次に、研究Ⅱでは、発達障害幼児の事例検討を行う。定型発達幼児と同様のぬり絵を行わせ、両者のぬり絵と比較検討するとともに、発達障害幼児の発達過程においてぬり絵がどのように変化していくかを調べる。

研究Ⅰ

方法

1) 対象児

対象児は、富山市内の幼稚園年少クラス5名(男2名, 女3名; 平均年齢4歳1ヵ月)、年中クラス4名(男3名, 女1名; 平均年齢5歳1ヵ月)、年長クラス6名(男4名, 女2名; 平均年齢6歳2ヵ月)及び家庭保育児(男, 2歳11ヵ月)の合計16名である。

2) 期間及び場所

2007年12月中旬から2008年1月上旬に、幼稚園生は幼稚園終了後の教室で行い、家庭保育児は自宅で行った。なお、幼稚園では、年少, 年中, 年長ごとに分かれ、それぞれ一教室に集まって実施した。

3) 画材

ぬり絵には、「幼児の脳を育てるぬりえのほん」(尾崎・竹井, 2007)の内、「①はじめてのぬりえ(2歳前半〜)」の部門に収録されている「おこさまランチ」の絵柄を使用した。また、描画材として、年少児ではクレヨン(20色)、年中児と年長児では水性ペン(20色)を用いた。これらの画材を一人一セットずつ使ってぬり絵を行った。

4) 手続き

4名を一つのテーブルに座らせ、ぬり絵を子どもの前に一枚ずつ置く。そして、「この絵をきれいに塗って下さい」と教示し、自由に塗らせた。また、制限時間は設けず、子どもが「終わり」と言うまで塗らせた。

また、終了後にぬり絵を塗った感想を尋ねた。

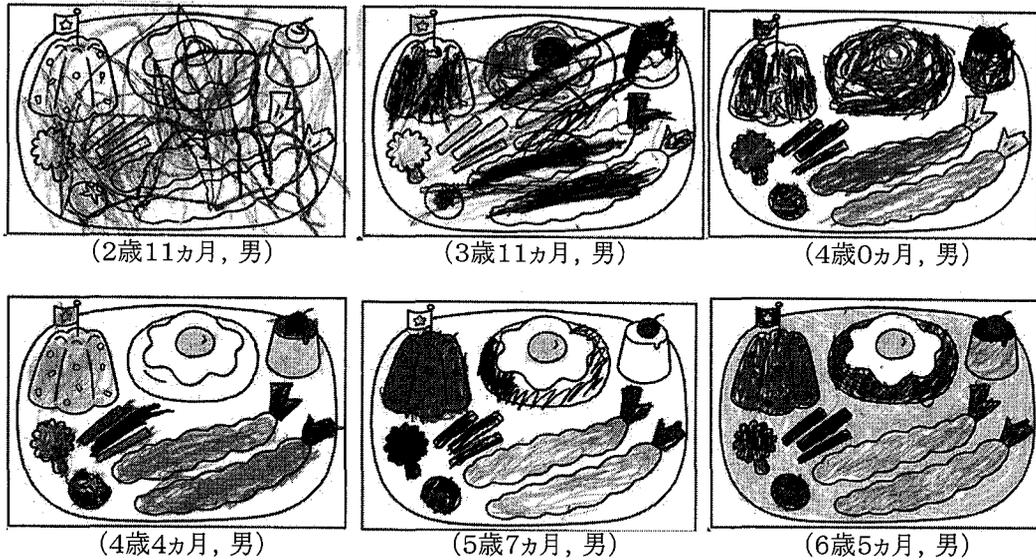


Figure2 各年齢児のぬり絵の例

Table1 幼児期におけるぬり絵の発達段階 (尾崎・竹井,2007)

	年齢	ぬり絵の発達段階	塗りすぎ・塗り残し
第1段階	2歳前半～	図の中を塗るという認識がなく、図の上をなぐり描きしたり、図に点を打ったりして、マーキングする段階	塗りすぎあるいは塗り残しが大変多い
第2段階	2歳後半～	図の中を塗ることを認識し始めるが、図の中にギザギザ線やグルグル丸を描いて、「塗れた」と思う段階	塗り残しは大変多いが、塗りすぎはほとんどない
第3段階	3歳～	図の中を塗ることを理解し、塗りつぶすことに集中するが、塗りすぎに注意を払わない段階	塗り残しが急減するが、塗りすぎが増加する
第4段階	4歳半～	図の中をきれいに塗ることを意図して塗る段階	塗り残しと塗りすぎが共に少なくなる

結果及び考察

「おこさまランチ」のぬり絵を2歳11ヵ月から6歳5ヵ月の16名の子どもに塗らせたが、塗ることを拒否する子どもは皆無であった。全員が熱心にぬり絵に取り組んでいた。また、最後にぬり絵の感想を尋ねたところ、全員から「楽しかった」「もっとやりたい」「好きだった」「上手く塗れた」など肯定的な回答が寄せられた。ぬり絵が幼児にとって抵抗がない課題であり、塗る作業に集中して取り組むことができ、楽しい活動であることがわかる。しかし、取り組む様子は、年齢によって異なっていた。年少児では、一人で黙って熱中して塗っている子どもと「これはトマト」「プリンが塗れた」などぬり絵について話しながら塗る子どもに分かれた。年中や年長になると一人で熱中して塗る子どもが増えていった。

塗りあがりを見ると、2歳児では、絵の上をなぐ

り描きしているが、3歳になると大きくはみ出しているものの絵の上を集中して塗るようになった。そして、4歳を過ぎると絵からはみ出して塗ることが少なくなり、5,6歳になるとかなりきれいに塗れるようになった。各年齢におけるぬり絵の典型例をFigure2に示す。なお、一般に女兒の方が男児よりもぬり絵の発達が早い、そのためFigure2では男児だけの作品を並べて比較した。尾崎・竹井(2007)は、ぬり絵の発達段階についても4段階に分類した(Table1)。第1段階は、図の中を塗るという認識がなく、図の上をなぐり描きしたり、図に点を打ったりして、マーキングする段階、第2段階は、図の中を塗ることを認識し始めるが、図の中にギザギザ線やグルグル丸を描いて、「塗れた」と思う段階、第3段階は、図の中を塗ることを理解し、塗りつぶすことに集中するが、塗りすぎに注意を払わない段階、そして第4図の中をきれいに塗ることを意図し

Table2 発達段階を考慮したぬり絵の開発と適用年齢
(尾崎・竹井, 2007)

	～2歳	3歳	4歳	5歳～
①はじめてのぬりえ	◎	○	○	
②ぐるぐるぎざぎざぬりえ	◎	◎		
③いろいろぬりえ	○	◎	◎	○
④きほんのぬりえ	○	◎	◎	◎
⑤おもしろぬりえ		○	◎	◎
⑥おはなしぬりえ		○	◎	◎
⑦ぬりえであそぼう		○	◎	◎

注) ◎は「最もふさわしい」、○は「ふさわしい」を表す

て塗る段階である。Figure2に示した例を見ると、2歳11ヵ月児は第1段階、3歳11ヵ月児は第2段階、4歳から5歳の3名は第3段階、6歳5ヵ月児は第4段階に相当し、年齢が高くなるにともない発達段階が進んでいくことが分かる。

尾崎・竹井(2007)は、ぬり絵の発達段階(Table1)を考慮したぬり絵の絵柄を検討し、Table2に示すような7つの部門に分類した。すなわち、①はじめてのぬりえ、②ぐるぐるぎざぎざぬりえ、③いろいろぬりえ、④きほんのぬりえ、⑤おもしろぬりえ、⑥おはなしぬりえ、⑦ぬりえであそぼうである。本研究で用いた「おこさまランチ」のぬり絵は、この「①はじめてのぬりえ」の部門に収められており、対象年齢は2歳前半と設定したものである。従ってこの部門のぬり絵には、2歳児が興味を示す絵柄を選んだ。そして、これは、図の中を塗るという概念が育っていない2歳児が、興味のある絵柄の上をなぐり描きやマーキングすることによって、絵柄のイメージを膨らませ、表象能力を育てていくことを目的にしている。本研究において、この部門のぬり絵を様々な年齢に実施したところ、2歳児と3歳児では、このねらいに沿った結果が得られた。また、図の中を塗るという概念をもつと考えられる4歳児や5歳児では、同じぬり絵でも、2歳児や3歳児とは異なり、絵柄をしっかりと認識しながら、図の中をきれいに塗っていくことが見られた。また、塗る色をみると、年少児では、絵柄の内容と関係のない色で塗りつぶしているが、4歳以降になるとプチトマトを赤で、ブロッコリーを緑で塗るなど絵柄にふさわしい色を

塗るようになる。このように同じ図柄を異なる年齢段階の子どもに塗らせることにより、ぬり絵自体の発達とその背景にある認知発達が見て取れると言えるよう。

研究Ⅱ

方法

1) 対象児と教育相談の概要

対象のA児は、言語発達と社会性発達の遅れを主訴に、T市内の教育相談施設に来談した3歳6ヵ月(来談時)の男児である。教育相談施設では、週1回3ヵ月間、A児の人との関係性を発達させるための遊戯療法を行うとともに、母親に対して家族との関係性を築くための並行面接を行った。ぬり絵は、その遊戯療法において実施した。なお、母親の面接を筆者(以下、Co.とする)が、A児の遊戯療法は、母親面接がない時はCo.が、母親面接中は大学生(以下、Co.S.とする)が行った。

2) 対象児のアセスメント

①生育歴：A児は、小さい時は全く手のかからず、長時間一人遊びをする子どもであった。1歳で初語を話し、1歳半健診では、「ワンワン」「パパ」「ママ」と標準的に言葉を話していたので、健診で発達障害のリスクを指摘されることはなかった。その後、2歳までは言葉数も増えていったが、2歳以降3歳まで全く言葉を話さなくなった。3歳になって少し話すようになり、来談1.2ヵ月前から急に言葉が話せるようになった。しかし、長い言葉は、遊びながら独り言のように言っているだけであり、大人が

質問して答えることができず、会話が成立しなかった。そして、話していると声がうわずる状態であった。また、小さい時は目があわなかったが、3歳になって言葉が出てきたのと同じように目があうようになった。

遊びとしては、プラレール、レゴブロック、ウルトラマンと怪獣の戦いごっこなどが好きで、一人でもくもくと遊んでおり、母にぐずったり一緒に遊んで欲しいという要求をしなかった。しかし、公園や遊び場につれていくと誰にでも話しかけて仲良く遊んでおり、他の人への恐怖感がない。また、小さい時から英語のDVDをずっとみていた。日本語よりも英語で言う方が早く覚えた。数えるのも1から12くらいまで英語で言い、アルファベットもわかる。

②来談時の様子：A児は、大変穏やかな印象で、表情も柔和である。玄関に入る時には、脱いだ靴を母親のやる通りにきちんと並べておいた。また、母親に「あいさつしなさい」と指示されると、ペコッと頭をさげた。次に「こんにちはと言いなさい」「名前を言いなさい」と指示されるともぞもぞと言うが何を言っているのかは聞き取れない。母親の指示には従っているが、その動作や言葉は相手に向かって発せられているものではなく、指示通りにただ動くといった印象である。母親は、A児に対して、母親に反抗することなく指示がよく通る育てやすい子どもという受け取り方をしていた。筆者が質問すると、ときどき目があい、質問に応じる。手に持っているウルトラマンについて聞くと、もぞもぞと答えた。しかし、「何して遊ぶのが好き？」と聞いても応答がない。A児に話しかけても、A児の気持ちと繋がらず、こちらに向かってくる手ごたえがない、子どももの生気に乏しいという印象である。描画は、なぐり描きの段階であるが、母親に「風船を書いてごらん」と言われると、クレヨンの後ろで不安定な持ち方で丸を描く。さらに本の風船を見ながら、紐を描く。筆者が「これ何？」と聞くと、「ふうせ〜ん」と尻上がりに弱弱しく言った。また、母親の話によると、絵本を読んでいる時に、ページを抜かしたり、話をかえたりすると、話が違うと言ってくるので、絵本の筋はわかっているということであった。

③自閉症スクリーニング検査：「自閉症スクリーニング質問紙（ASQ）日本語版」について母親に

記入を依頼した。ASQ（Autism Screening Questionnaire）は、RutterとLordによって開発された検査であるが、これを大六・千住・林・東條・市川（2003）が日本語版として作成したものが、本研究で使用した「ASQ日本語版」である。「ASQ日本語版」は自閉性症状を表す39項目からなり、それに対して「はい」「いいえ」の二者選択で回答を求め、39項目の自閉性症状の合計得点を算出する。「ASQ日本語版」では、合計点が13点以上の場合に自閉症のリスクがあるとみなしている（大六・千住・林・東條・市川、2004）。A児の合計得点は、14点であったことから、A児には自閉症のリスクがあるとみなされた。

④言語発達検査：「絵画語い発達検査（PVT）」を実施した。検査者はCo.である。9回の遊戯療法の内、第2回目と第9回目に検査を実施した。第2回目では、生活年齢が3歳6ヵ月、語い年齢が2歳であり、評価点（SS）は6点であった。第9回では、生活年齢が3歳8ヵ月、語い年齢が2歳8ヵ月であり、評価点（SS）は7点であった。

3) 期間及び場所

X年10月下旬からX+1年1月末までの期間に、T市内の教育相談施設プレイルームで週1回合計10回の遊戯療法が行われたが、その内、3回目、6回目、9回目、10回目の計4回ぬり絵を実施した。

4) 画材

ぬり絵には、「幼児の脳を育てるぬりえのほん」（尾崎・竹井、2007）の内、「①はじめてのぬりえ（2歳前半〜）」部門の「おこさまランチ」と「④きほんのぬりえ」部門の「かぶとむし」と「きょうりゅう」の絵柄を使用した。また、描画材としてクレヨン（24色セット）を用いた。

5) 手続き

テーブルに座らせ、ぬり絵を子どもの前に一枚ずつ置く。そして、「この絵を塗って下さい」と教示し、自由に塗らせた。また、制限時間は設けず、子どもが「終わり」と言うまで塗らせた。

結果及び考察

ぬり絵を実施したのは、10回の遊戯療法の内4回であるが、遊戯療法においてA児の成長がみられたので、その成長過程とぬり絵を照合して検討してい

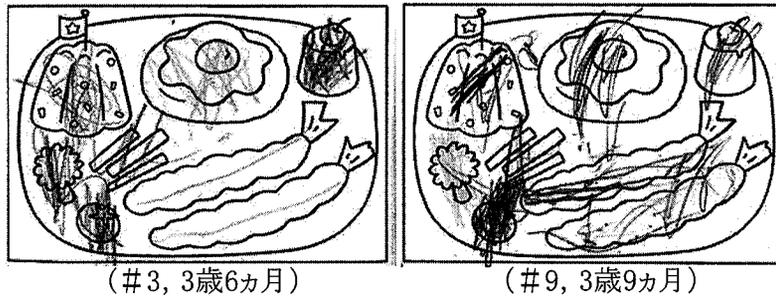


Figure3 A児の「おこさまランチ」のぬり絵

くことにする。

第I期 母への愛着が芽生え、母への応答が確かになった時期 (#1～#3 X年10月～11月)

#1では、母親が資料を書いていると、覗きこんだり、母親の背中にもたれかかっていたりしているが、膝の上ののったり、正面から母親に接近することはなかった。このように母親にべったりくっついたり要求をしつこく行うことはない。しかし、淡白な形態ではあるが、母親への愛着行動が見られた。

#2では、プレイルームに設置されている箱庭に次々とミニチュアを置いていく。A児が持ってきたものに対して、Co.がその名称を言うと、A児はほとんどオウム返しで答える。その時の声は高くうわづっていて、イントネーションが平板である。自分からもってきた物の名前を言う時もある。しかし、Co.が「Aちゃん、これ何色？」と聞いても答ええないが、母が聞くとすぐに答える。次にA児が、大きなボールを押して、母に押し付けてニコニコしている。Co.がそこに加わり、「ボールいくよ」というが、なかなかCo.を見ないで、他の所をあっちこっちみている。Co.が何回か呼ぶとようやく目があう。目があった時にボールを投げるとちゃんととることができた。目を合わせることがすぐにできない。この回の最後には、絵画語い発達検査を行った。「犬はどれ」「とけいはどれ」などは興味を持って指をさしたが、「動物は」と言った途端、椅子から降りてどこかにいく。追いかけて、Co.が聞くと、適当にさした。語い年齢は2歳で評価点(SS)は6点であった。

#3では、オウム返しは相変わらずであるが、自分から話すことが増えてきた。母親もこの所、急に二語文や三語文ができたので驚いていると言う。

母親面接では、小さい時にA児は母にスキンシップを求めてくることがなかったこと、母がほっぺにキスをしようとするとう大変嫌がったこと、また体重が重かったので母親はほとんどA児を抱くことはなかったことが語られた。また、一人で置いておいても泣くことがなかったので、家や車の中に一人で留守番をさせていたが、最近急にスキンシップを要求してくるようになったり、母親が少しでも見えなくなると泣いて探しに来るようになったとのことであった。母は育てやすいと思っていたA児が、最近手がかかるようになったことに対して困っている様子であった。Co.が、現在の母親のA児への関わりの様子を聞くと、母は、毎日忙しく動いていて、A児とじっくりと向き合う時間がないと言う。Co.がA児にしっかりと関わるのが大事であることを話すと、母親は、子どもとどのように遊べばよいかわからないと訴えた。そこで、Co.は、母親に自分のできる所からやってみることを。例えば、絵本を読んであげたり、遊んでいる横にいてあげるだけでよいことを伝える。これからは、家でA児との遊びを積極的に行い、それを相談日の時に報告してもらうことにした。

#3の終わりに、A児にぬり絵をしてもらった。そのぬり絵は、Figure3の左図である。おこさまランチのそれぞれの食材の上になぐり描きでマーキングしているが、絵柄ごとに色を変えて描いた。また、長細い海老フライには、それに沿って線を引いた。これは、Table 1の発達段階では、第2段階に相当するであろう。研究Iの定型発達幼児のぬり絵(Figure2)と比較すると、2歳11ヵ月児と3歳11ヵ月児の間位の発達段階であり、この時3歳6ヵ月齢であったA児のぬり絵は、定型発達幼児の発達段階

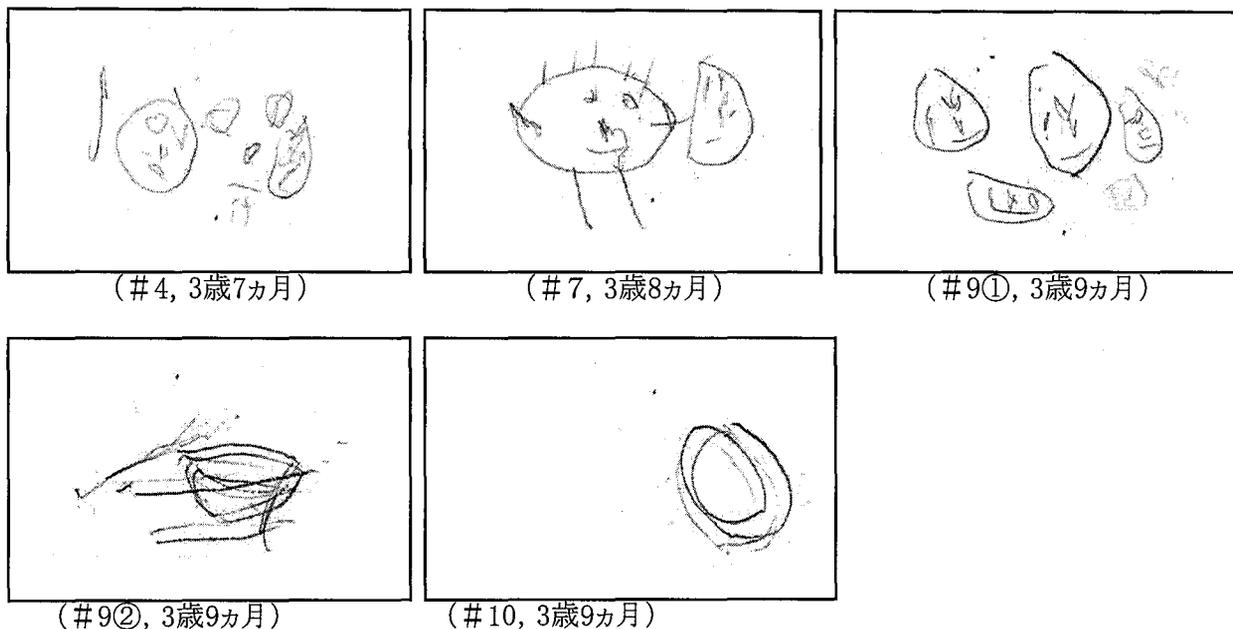


Figure4 A児の自由画

に相当している。

第Ⅱ期 他者への応答が少しできるようになった時期 (#4～#7 X年11月～12月)

#4では、A児は、来談するなり、自分の持ってきた鞆からウルトラマン人形を次々にだして、Co.にそれらの名前を教えてくれる。しっかりとCo.の顔を見て、一つ一つ説明するように言った。発音が不明瞭で何を言っているかは分からないが、Co.は、この時初めてA児と気持ちが繋がってやりとりしている感触を得た。次に、箱庭をする。箱庭に次々と車を置いていく。Co.が質問するとタイミングがよければ答えてくれるが、自分の興味に集中している時には、話しかけても全くこちらを見ない。側にいた母親には「A児が自分の世界の中で遊んでいるので、一緒に遊びながら他者との世界に広がるように声をかけて関わりながら遊べるようにするとよい」と助言する。その後、Co.が棚からお化けをみせると、母親の所に走って行って、怖がって母親にすがっていった。母親がしっかりと安全基地になっていた。この頃になると、遊戯療法中に一人遊びをすることが少なくなってきた。Co.かCo.Sと一緒に遊んでいる時は、楽しそうであるが、Co.が母親と話している時、Co.Sもいない時には、面白くなさそうにフラフラしたり、Co.と母親が話している所に来て、色々要求するようになった。

最後に、絵を描いてもらった (Figure4の上段左図)。最初に大きな丸を描き、その中に小さな丸を描きながら、目、鼻、口と言っているようであるが、発音が不明瞭で聞き取れない。2つの顔を描いたので、Co.が「これは誰？」と聞いても、きよんとしている。Co.が「これはお母さん？」と聞くと、「お母さん」とオウム返しで言う。Co.が「これはお父さん？」と聞くと、「お父さん」とオウム返しで言う。母親の話では、A児はまだ「誰？」というのが分からないが、家ではようやく「これは何？」というのを言い始めた。また、A児は自分のことを「ぼく」とか「Aちゃん」とか言ったことがない。「Aちゃんのお父さんは？」と聞いてもわからない。自己認識そして「Aちゃん」が自分であることの認識がまだできていないことがわかる。

母親面接では、最近、家では母親がトイレに行く時、「戸を開ける」と泣いて戸を激しく叩くようになったことが語られた。また、以前は長時間ビデオやDVDを見ていたが、最近は、自分で勝手に見ないようにビデオやDVDを隠してある。その分、母親はA児に本を読んだり玩具で遊んだりしたと言う。Co.はA児が今日成長したように感じたので、母親のやり方がよかったためであることを説明した。また、以前は、母親の指示に従っていたが、最近では「いや」とか「だめ」とかを言うようになり、聞き分け

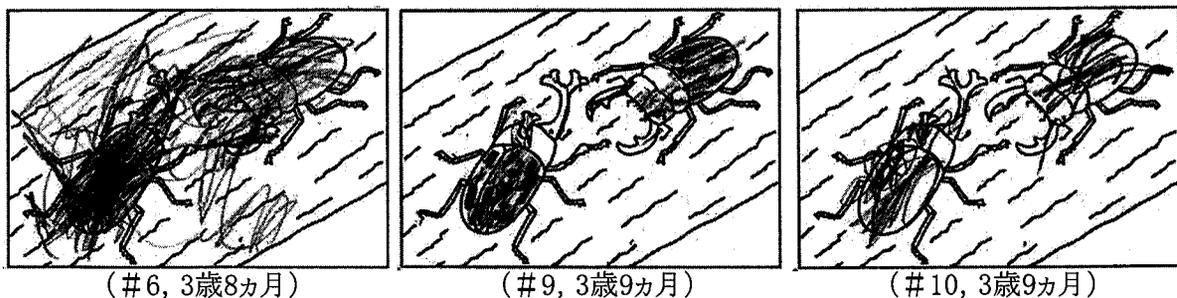


Figure5 A児の「かぶとむしとくわがた」のぬり絵

が悪くなったことが語られた。また、#5の母親面接では、最近、気に入った玩具を持って、「ぼくのもの」というジェスチャーをするようになったことが語られた。以前は、兄にゆずることが多かったが、最近はゆずらなくなった。しかし、最近、テレビやDVDの回数を決めるようにして、「1回だけ」と言って聞かすと、1回だけでやめるようになった。これらから、この時期には、A児の母親との愛着形成がさらに進むとともにA児の自我が発達し、自己主張がでてきたことが分かる。

#6では、「かぶとむし」のぬり絵をした (Figure5の左図)。ぬり絵を渡されるなり、すぐに虫の上をなぐり描きのように塗りつぶした。何色かで上塗りしていった。

#7では、Co. が箱庭をしているA児に対して、お化けをさしながら、「このお化けこわい？」と聞くと「こわいよ」と答えた。また、この日は、Co.に説明しようとして「えーっと、えーっと」という言葉が聞かれた。これまでCo.の質問に対してオウム返しがほとんどであったが、この頃になるとオウム返しが少なくなって、自分で答えることが見られるようになった。その後、「お母さんの絵を描いて」と言うと、Figure4の上段中図を描いた。描きながら目、鼻、口と言っているようだがはっきり聞き取れない。誰にも指示されないのに、髪と手と足を描いた。

母親面接では、最近、母が兄を怒っていると、兄を怒らないでというように母にからみついてきて、兄には涙を拭いてあげたり、頭をなでてあげていることが語られた。また、自分も一緒に泣くこともある。以前には、涙を拭くくらいのことはあったが、こんなにA児が動揺して泣くことはなかった。また、

最近、赤ちゃんが自分より小さいことが分かるようになってきた。赤ちゃんとお母さんがいると、「赤ちゃん」、「お母さん」と二人を区別して呼ぶ。小さい赤ちゃんを可愛がろうとする。昨日、父親が新しいパジャマを着ていたら、パジャマをさして「これ何？」と聞いたと言う。最後にCo.は母親に対して次回までに3週間の冬休みがあるので、家で大人が良い応答をして遊んであげることが大事で、冬休みに色々遊んでみるとよいことを説明した。遊び記録の表を渡し、冬休み中に遊んだ内容を記録表に書くように求めた。

第Ⅲ期 安定した母子関係を基盤に目を合わせて応答するようになった時期 (#8～#10 X+1年1月)

#8では、3週間ぶりに来談。Co.が後から相談室に入っていくと、「来た」と嬉しそうに躍り上がっている。Co.の足音を聞いて「来るかな」というように待っていたと母親から聞いた。嬉しそうにしている表情がこれまでにない生気にあふれたものであったのでCo.は驚いた。さらに、こちらの問いかけに対して、目をみて答えることが多くなり、また、動きも俊敏な感じがした。この回では、初めてトランポリンをした。大変嬉しそうに積極的に飛び跳ね、またボールを沢山トランポリンの上に乗せて、自分が跳ねると同時にボールが跳ねるのを楽しんでいた。側にいるCo.Sと喜びを共有していた。最後になって、A児が靴下を履いているのに気がついた。以前は、プレイルームに入るなり靴下を脱いでいた。来談当時、これは母には気になっていたことだ。母に尋ねると、最近家でも何故か靴下を脱がなくなったそうだ。安定した人間関係の中で、感覚の過敏性が変化したことが考えられる。

母親面接では、冬休み中どのように遊んだかを書

いた表を見ながら母親に冬休みの遊びの様子を聞いた。家族での取り組みがA児の急激な発達変化に繋がったことを母親に伝える。

#9では、来談すると、持ってきた大きなリュックの中の物をCo.に見せてくれる。6, 7体のウルトラマンを一つずつリュックから出して説明してくれる。かなり長い話をするようになったが、発音が不明瞭で全く何を言っているのか分からない。プレイルームでは、的当てボードの後ろに回り、後からボードを一つ一つ指しながら明瞭な発音でone,two…fourteenと言って数えた。数えると前に回り、Co.が手を叩くと、「もう一回」とはっきりした発音で言い、これが4回位繰り返された。最後には、ボードを叩くことと英語の数唱が一对一对応であった。

この回では、ぬり絵と絵画語り発達検査を行った。最初に、「おこさまランチ」のぬり絵を塗った(Figure3の右図)。大人が指示をしなくても自分で塗った。#3の時のぬり絵(Figure3の左図)と比べると、塗りつぶそうとする意図がみられ、何よりもプチトマトが赤で、ブロッコリーが緑に塗るようになった。ぬり絵をした後に、自分で紙を裏返して絵を描いた(Figure4の上段右図)。マルを描いて、その中に「目」「鼻」「口」とはっきりした発音で言いながらひとつひとつ描いていく。同じ要領で全部で4つの顔を描いた。母が「これ誰？」と何度かきくと、「おとうさん、おかあさん、〇〇ちゃん(兄)、Aちゃん」とひとつずつ確認しながら答えた。#7回の時と描いた絵にそれほど違いはないが、描く様子は全く異なっていた。まず描きながら話す時の発音が飛躍的に良くなった。そして、描いている対象をはっきりと認識できるようになっており、家族の成員の認識と自分の認識が明確になった。次に、Co.がA児に「かぶとむし」のぬり絵を渡したところ、A児は横にいた母親の手をつかみ、「一緒に塗って」というような仕草をしたので、母親はA児の後ろに回り、A児の手を持って、かぶと虫の胴体を塗った。すると、その後、A児は一人で、足と角の細かいところを線にそってクレヨンで線を引いた。#6のぬり絵(Figure5の中央図)と比べると、#6ではぬり絵の絵柄から塗ったところのはみ出しても全く無頓着であったが、今回は、きちんと絵柄の中を塗るこ

とを意識し始めたのかもしれない。自分ではきれいに塗れないところは母の助けを借り、自分で塗れると思った足と角は自分で塗ったのではないかと思われた。また、ぬり絵をした後には、紙を裏返し、クレヨンに右手に持てるだけ持ち、円とか線を引いた(Figure4の下段左図)。筆者は、最初、ただ色を楽しんでいるだけかと思ったが、後で見直すと、丸と線がかぶと虫を表現したように見えた。

次に、絵画語り発達検査を行った。#2の時よりもきちんと机に座って指を指して答えていった。具体物は喜んで答えたが、「動物は?」「飛ぶは?」と聞くと、急に躊躇して、興味を失ったようだったが、続けて行くと分かるものもあった。評価点は#2の時6点であったが、今回は7点であり、僅か2ヵ月半の間に1点増加した。

#10では、母親とCo.が話している机の所に来て、「お勉強」と言いながら椅子に座った。そこでCo.が「かぶとむし」のぬり絵を前に置くと、#9の時と同じ様に母の手をつかんだ。母が「だめこれはAちゃんが一人で塗るのよ」というと、一人でクレヨンケースから茶色のクレヨンを取って塗った(Figure5の右図)。クレヨンの持ち方は、親指と人差し指の根元でクレヨンを挟む持ち方で大変持ちにくそうであった。胴体を塗ると今度は角のところに一本線を引いた。ひき終わると「できた」と言った。また、紙を裏返して、#9と同じように3本のクレヨンを回外握りで持ち、円を描いた(Figure4の下段中央図)。次に線を描こうとしたが、円が用紙の端に書かれていたために、描く事ができなかった。すると、Co.に「もう1回」と言った。白い紙かとおもって差し出すと受け取らないので、「かぶとむし」のぬり絵を要求しているようだったが、それがないので、他のぬり絵を4, 5枚見せると、「きょうりゅう」のぬり絵をとった。母親に左に描かれている恐竜をさして「これなに？」と聞いた。「きょうりゅう」のぬり絵は大きいので、回内握りでクレヨンを持って、大きくなぐり描きのように塗った(Figure6の左図)。しかし、左の恐竜のしっぽの部分を意識して塗ったようにも見える。その後、紙を裏返して絵を描く際に、紙の端を少し持ち上げて裏面の「きょうりゅう」のぬり絵を覗いた。そして、クレヨンで大きな丸を描き、いつもなら最初に「目」と言いながら描

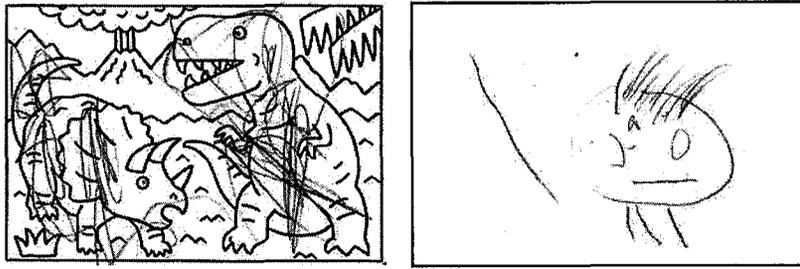


Figure6 #10 (3歳9カ月) におけるA児のぬり絵と自由画

くところが、この時はまず丸の上の方に小さな丸を描いた、その後「目」「口」と言いながら描き、さらに足や髪を描き足し、最後に左の方に縦線を描いた (Figure6の右図)。この最初の小さな丸は恐竜の角であるようだ。また、最後に描いた縦線は、恐竜のしっぽのように見えた。

総合的考察

A児は、1歳時には言葉を話していたが、1歳から2歳までの間に全く言葉を話さなくなった。またこの1歳から2歳の間は、人とのスキンシップを嫌がり、対人相互作用をさけて一人遊びに没頭した時期でもあった。その後、3歳を過ぎて言葉が出てくるようになり、来談1,2カ月前から言葉の数が増えてきたが、さらに来談後は急速に言語能力が高まってきた。言語数が急増するとともに二語文や三語文もできるようになった。そして、来談初期には多くみられたオウム返しが段々減少し、簡単なやりとりの会話が成り立つようになった。まだ長文になると何を言っているかが分からないほど不明確な発音であるものの、単語の発音は格段に明瞭になり、声の上ずりや平板なイントネーションもない話し方ができることもある。同時に、母親との関係も緊密なものとなっていった。1歳から2歳の間には、母を求めず、一人であることも平気であったが、最近では、母がトイレに行っただけでドアの前で泣き叫ぶほど、母と一緒にいることを求めるようになった。また、以前は人に指示されると言われるままにしていたり、人に物を貸したり取られたりしても抵抗することがなかったが、最近では、「いやだ」と自己主張するようになった。

以上のように、A児は、来談後の3カ月間に、自我発達、言語発達、対人関係の発達を急速に伸ばし

ていった。これは、ちょうどA児が発達の兆しを見せた時に来談し、さらに母親面接によって母親とA児との関わりを深めることを目指したこと、そして遊戯療法において受容的共感的にA児に関わり、安心感の中で他者との関係を築く体験をしていったことがA児の発達をさらに押し上げていったと考えられる。

さて、このような急激な発達を示す中で、A児にぬり絵を行った。#3の時(3歳6カ月)に塗った「おこさまランチ」では、絵の上をなぐり描きで描くのではなく、ちゃんと絵柄を識別して、絵柄の上に塗りつけている。これはぬり絵の発達段階では第2段階である。しかも、各絵柄に塗る色を変えているのである。これは、絵を認識して、それに色を塗りつけることにより絵のイメージに参加することができるようになったことを示しており、A児の表象機能発達が定型発達とそれほど隔たりがないことを推測させるものである。#9の時(3歳9カ月)に塗った同じ「おこさまランチ」では、全体の印象は#3の時とあまり大きな違いがないが、海老フライを塗りつぶそうとする意図が#3の時よりも感じられる。しかし、一番の違いは、プチトマトを赤でプロッコリーを緑で塗ったことである。研究Iで示した定型発達児のぬり絵と比較すると、年長になると絵柄に適した色を塗るようになることが見られたが、A児でもこのぬり絵の発達変化が起こっていた。

次に、#6の時(3歳8カ月)に塗った「かぶとむし」では、かぶと虫の上を集中的に塗っており、はみ出しはかなり大きい。塗ることの認識が明確になったことが分かる。これはぬり絵の発達段階では第3段階に相当する。ところが、#9の時(3歳9カ月)には、かぶとむしを自分で塗らずに母親と一緒に塗ることを要求するので、母親がA児の手を持つ

で塗った。そして、塗り終わると、今度は自分で角と足の細い所をクレヨンで線を引いた。これは、何を表しているのだろうか。A児は、塗ることを意識するようになった。しかし、自分では上手く塗れないのが分かっていて、母親に助けを求めて一緒にきれいに塗った。そして、自分できれいに塗れる角と足は自分一人で塗ったと考えられる。A児の絵柄の認識、その絵柄を塗りつぶすことの認識が2,3ヵ月で急速に発達したことが伺われる。さらに、かぶとむしを塗り終わると、自分で紙を裏返し、クレヨンを持てるだけ持って丸を描き、次に線を何本か描いた (Figure4の下段左図)。筆者は最初色を楽しんでいるのかと思ったが、後で絵を眺めた時に、それがかぶとむしに見えることに気がついた。まさに、絵柄を塗ることで絵柄のイメージ世界を楽しみ、それによってイメージ世界が一段持ち上がり、自分で描きたくなる衝動に結びついたと考えられる。この現象は、#9の時に塗った「おこさまランチ」でも見られた。塗り終わると、紙を裏返して、顔を描き始めた (Figure4の上段右図)。最初に大きな丸を描き、その中に、「目、鼻、口」とはっきりした発音で話し、その発音と一対一対応であわせて小さな丸を描いた。同じ手順で4つの顔を描いた。#4や#7の時の顔の絵 (Figure4の上段左図と中央図) と見た感じは変わらないが、#4と#7の時は、発音が大変不明瞭であり、発音と丸の描画が一対一対応になっていなかった。しかも、#4と#7では、描いた顔が誰であるかを聞かれても答えずどこかに行ってしまったが、#9では、母親が「お父さんは?」「お母さん?」と聞くときちゃんと指さすことができた。さらに、一番小さい顔をさして「Aちゃん」と言うことができた。これは、ぬり絵と同じ絵柄を描いたわけではないが、ぬり絵を塗ることによって、イメージ世界が膨らみ、絵を描きたくなったのではないかと考えられる。A児は、「おこさまランチ」を塗って、家族の食事風景を思い出しているのではないかと想像さえしてしまう。この#9のぬり絵の解釈を、#10の際に確かめることができた。#10では、「かぶとむし」を一人で塗ったところ、絵柄の中を塗ることを意識した塗り方であり、角を塗った後に「できた」と言ったことから、A児がぬり絵の絵柄を認識し、その中を塗りつぶすという意識がしっかりと芽生え

ていることがわかる。しかし、A児のクレヨンの持ち方は人差し指を屈曲させそれと親指で挟んで持つという大変不安定な持ち方であり、その持ち方ではきれいに塗ることができない。そのため、母親に塗ることを補助するように要求したと思われる。尾崎 (2008) は、円塗課題をしている際の筆記具持ち方を289名の幼児に対して調べたが、このような不安定な持ち方をする幼児は2歳児でわずかにみられるだけであった。定型発達幼児では、認知発達と運動発達が連関して高まっていくことが認められたが、A児については、きれいに塗りたいという意図はあるが、それに対して運動発達が伴わない状態であり、認知発達と運動発達のアンバランスがあることが考えられる。また、#10では、「きょうりゅう」のぬり絵を行った後に裏面に描いた絵は、ぬり絵を見ながら描いた後に角を描いたことから、恐竜であることが推測された。#9で描いた裏面の絵の解釈は、この#10のぬり絵と自由画の描画経過からも裏付けることができよう。

A児は、生育歴や行動観察からも自閉症スペクトラムの特徴を持つことが考えられるが、今回、ぬり絵によって自閉症スペクトラムをスクリーニングするには至らなかった。A児のぬり絵は、定型発達児と概ね同じ段階を経て発達していた。A児は認知発達が高いことから、高機能の子どもであることが窺われる。自閉症スペクトラムであっても高機能の場合は、ぬり絵は定型発達児と変わらないようだ。しかし、今回、認知発達が急激に伸びている最中に行なったぬり絵であった。それ以前からのぬり絵の経過を見ることで、自閉症スペクトラムの子どものぬり絵を調べることが必要である。また、今回、1例だけの検討であったので、さらに多くの自閉症児のぬり絵を調べて検証していくことが求められる。

しかし、本研究ではA児のぬり絵を調べることで、ぬり絵によって子どもの発達段階を推測できることが分かった。また、ぬり絵をすることにより表象機能や象徴機能の発達を持ち上げることができるといふ、ぬり絵の教育的意義を確かめることができた。

謝辞

本研究を進めるにあたって、Aくんとお母さんに多大なご協力をいただきました。また、本研究の発

表に対して了承していただいたことに深く感謝いたします。ぬり絵の実験については、ご協力いただいた幼稚園の先生方、保護者の皆様、そして子ども達に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 大六一志・千住博・林恵津子・東條吉那・市川宏
伸 2003 自閉症児・A D H D児における社会的障害の特徴と教育的支援に関する研究 平成14年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））報告書
大六一志・千住博・林恵津子・東條吉那・市川宏
- 伸 2004 自閉症児・A D H D児における社会的障害の特徴と教育的支援に関する研究 平成13年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書
小林重雄 1977 グットイナフ人物画知能検査ハンドブック 三京房
古賀良彦 2005 脳をリフレッシュする大人のぬりえ きこ書房
尾崎康子 2008 幼児期における筆記具操作と描画行動の発達 風間書房
尾崎康子・竹井史 2007 幼児の脳を育てるぬりえのほん メイト